



////////////////////////////////////

# 日本植物分類学会 ニュースレター

////////////////////////////////////

No. 76

Feb. 2020

## 今号のトピックス

日本植物分類学会第 19 回大会の発表に際して確認事項があります  
3/1 開催の公開シンポジウムのご案内があります (12 ページ)

## 目 次

### 諸報告

2020 年度第 19 回日本植物分類学会賞 (学会賞・奨励賞)	
受賞者の決定	2
2020 年度第 14 回日本植物分類学会論文賞の決定	3
2019 年度第 3 回メール評議員会議事抄録	4
2019 年度日本植物分類学会講演会の報告	5
2019 年度日本植物分類学会講演会に参加して	5
2019 年度野外研修会の報告	7

### お知らせ

日本植物分類学会第 19 回大会 岐阜事務局からのお知らせ	12
2020 年度総会のお知らせと審議事項	13

会員消息	19
------	----

# 諸報告

## 2020 年度第 19 回日本植物分類学会賞（学会賞・奨励賞）受賞者の決定

学会賞選考委員長 瀬戸口浩彰（京都大学）

今年度の学会賞、若手奨励賞の受賞者は下記のように決定しました。2020 年 3 月 2 日の午後、授賞式と受賞講演が行われます。また、受賞者には記念の楯と表彰状が会長より贈呈されます。

### 学会賞（2名）

- ・綿野 泰行 氏（千葉大・院・理）  
「分子マーカーを用いた植物の小進化・種分化機構の解明」
- ・高橋 弘 氏（岐阜県植物誌調査会）  
「被子植物の系統分類学的研究ならびに岐阜県の植物相の解明と植物誌の刊行」

### 若手奨励賞（3名）

- ・José Said Gutiérrez-Ortega 氏（千葉大・院・理）  
「Evolutionary history of the Neotropical cycad genus *Dioon* (Zamiaceae)」
- ・堀 清鷹 氏（高知県立牧野植物園）  
「シダ植物の無配生殖種における網状進化の解明と分類学的整理」
- ・山本 将也 氏（兵庫教育大学・教育）  
「日本固有のサクラソウ属植物における種分化と保全の研究」

学会賞の綿野泰行氏は、私たちの分野が分子マーカーを使うことが出来るようになった初期において、アロザイムや様々な DNA マーカーを用いた手法を駆使して、シダ植物における無配生殖型と有性生殖型個体間の交雑や、異質倍数体間での網状進化、あるいはハイマツとキタゴヨウの間で起きている浸透性交雑などを対象にして、精緻でパズルを解くような優れた研究を多く行ってきたことが評価されました。

高橋弘氏は、ホトトギス属などの旧ユリ科や基部被子植物における比較形態学や分類、送粉様式などについての多大な研究業績を重ねてこられました。また岐阜大学にご在職時から現在に至るまで一貫して、岐阜県の植物相の解明と、岐阜県植物誌の刊行に向けて多大な貢献をされてきたことが評価されました。

若手奨励賞の Gutiérrez-Ortega 氏は、ソテツ科の *Dioon* 属が新熱帯域で遂げた種分化について、古気候の変動に関連させて優れた研究を発表してきたことが評価されました。なお受賞者はメキシコのご出身で、千葉大学に留学して学位を取得されました。本学会において、元留学生の方が受賞されることは初めてとなります。

堀清鷹氏は、オシダ属のイタチシダ類における無配生殖種が、他種を親とした網状進化を起こしている現象について、核 DNA マーカーを用いて解析し、驚くほど多様な組み合わせとゲノム構成があることを明らかにしたことが評価されました。

山本将也氏は、サクラソウ属のイワザクラ節が第四紀後期の気候変動の中で、日本列島の地形や蛇紋岩土壌などに適応しながら、地域固有種を形成していくプロセスを明らかにしました。また、絶滅危惧種についての実践的な保全研究についても評価されました。

## 2020 年度第 14 回日本植物分類学会論文賞の決定

論文賞選考委員長 田村 実

2020 年度第 14 回日本植物分類学会論文賞は、2019 年に出版された英文誌『Acta Phytotaxonomica et Geobotanica』70 巻および和文誌『植物地理・分類研究』67 巻に掲載された論文のうち、編集委員および論文賞選考委員から推薦された論文 8 編を論文賞選考委員会において審査し、次の 2 論文に決定しました。

Kobayashi, Y. H., S. Fuse & M. N. Tamura. 2019. Biosystematic studies on the family Piperaceae (Piperales) I. Plastid DNA phylogeny and chromosome number of *Peperomia* subgenus *Micropiper*. Acta Phytotax. Geobot. 70 (1): 1-17.

選考理由：コショウ科の *Micropiper* は巨大な亜属で約 600 種を含むが、内部の多様性の構造は未知であった。分類形質に乏しく種同定も困難である。熱帯域を中心に分布しており、日本には 3 種しか分布しないにもかかわらず、著者らは（外群を含め）24 種 37 集団を収集・同定している。そして、そのうち 14 種の核型を分析し、既知サンプルと併せて 57 種 91 サンプルの分子系統解析を行っている。さらに、分類形質が乏しいのに、それぞれのクレードを支持する形質を見出し、植物群を認識していることから、植物自体をよく観察している姿勢がうかがえる。材料収集力、同定力、観察力、核型分析力、系統解析力と分類学に重要な要素を兼ね備えた論文である。未知であるが困難でもある分類群に真正面から取り組み、その多様性の理解に一定の成果を残した点が評価できる。ほとんどの種が海外にある難解な分類群ではあるが、今後、正式な節認識につながることを期待する。研究対象が日本に限定されておらず、世界を向いている点も、国際誌 Acta Phytotaxonomica et Geobotanica の論文賞にふさわしい。

Takayama, K\*, C. Tsutsumi\*, D. Kawaguchi, H. Kato & T. Yukawa. 2019. Rediscovery of *Liparis hostifolia* (Orchidaceae) on Minami-iwo-to Island in the Bonin (Ogasawara) Archipelago, Japan, and its identification using molecular sequences from a herbarium specimen collected more than 100 years ago. Acta Phytotax. Geobot. 70 (3): 149-158. (\* 共同第一著者)

選考理由：79 年間、存在が確認されなかったシマクモキリソウを花も果実もない状態で発見し、それを開花させてシマクモキリソウと確認したインパクトの強い論文である。さらに 103 年前～79 年前に採集されたシマクモキリソウの標本から DNA を抽出・塩基配列を決定することに成功し、今回の植物の塩基配列と比較して、今回の植物が DNA レベルでもシマクモキリソウであることを確かめた。79 年間存在が確認されなかったことは、今回の植物が無人島の南硫黄島に生育していたからという側面があり、今回、その南硫黄島を極めて綿密に再調査したことが、花も果実もないシマクモキリソウの発見につながっている。さらに、100 年以上前の標本から DNA 抽出に成功し、塩基配列を決定した技術力の高さは高く評価できる。そして、これまで不完全であったシマクモキリソウの記載を詳細なものに改め、クモキリソウ属の分類学的研究に貢献したことも高く評価できる。

## 2019 年度第 3 回メール評議員会議事抄録

庶務幹事 海老原 淳

2019 年 12 月 12 日(木)～12 月 27 日(金)に 2019 年度第 3 回メール評議員会が開催されましたので、議事抄録を報告します。この会議は 2019 年度の事業報告案と決算案、2020 年度の事業計画案と予算案を評議員に審議していただくために開催したものです。なお、2019 年度決算は 12 月末日が会計締切のため、本メール評議員会の議案中の決算額には概算部分がありましたが、本報告には確定版の決算を収録していることをご了承ください。

開催日時：2019 年 12 月 12 日(木)～12 月 27 日(金)

開催方法：電子メール媒体を用いた会議

参加者：評議員全員

### 議長選出

慣例では会長を議長に選出しているが、会長の出席が困難であったことから、予め会長代行に指名されていた藤井伸二氏が議長に選出された。

### 審議事項

第 1 号議案 2019 年度事業報告案

第 2 号議案 2019 年度決算案

第 3 号議案 2020 年度事業報告案

第 4 号議案 2020 年度予算案

### 審議結果

第 2 号議案、第 3 号議案、第 4 号議案において、修正の後、承認多数で可決された。委任状はなかったが、白票扱いが 1 票であった。

第 1 号議案 【賛成 11 票、反対 0 票、白票 1 票】

第 2 号議案 【賛成 11 票、反対 0 票、白票 1 票】

第 3 号議案 【賛成 11 票、反対 0 票、白票 1 票】

第 4 号議案 【賛成 11 票、反対 0 票、白票 1 票】

議事録署名人として土金勇樹評議員、綿野泰行評議員が選出された。

## 2019 年度日本植物分類学会講演会の報告

講演会担当委員 布施 静香

19 回目の日本植物分類学会講演会が 2019 年 12 月 14 日（土）に大阪学院大学で開催されました。今回は 6 名の先生方に下記の順でご講演いただき、97 名（うち学会員は 53 名）の参加がありました。



懇親会での写真

稗田 真也（滋賀県立大学 環境科学研究科）

「琵琶湖における特定外来生物オオバナミズキンバイの分類・生活史・管理について」

本庄 三恵（京都大学 生態学研究センター）

「遺伝子の働きから見た植物の季節性」

池田 啓（岡山大学 資源植物科学研究所）

「DNA 解析から改めて考える日本列島の高山植物相の成り立ち」

藤川 和美（高知県立牧野植物園）

「ヒマラヤから横断山脈、そしてミャンマーへ。植物標本を採集する」

能城 修一（明治大学 黒曜石研究センター）

「先史時代の西日本におけるイチイガシの重要性」

高宮 正之（熊本大学）

「日本産シダ植物メシダ科ノコギリシダ属 *Diplazium* の分類に関する四半世紀の成果」

稗田先生は、琵琶湖で猛威を振るっている侵略的外来種オオバナミズキンバイについての調査成果をお話しくださり、防除法についてもご紹介くださいました。本庄先生は、自然環境下で様々な遺伝子が季節によって発現量を変化させる膨大なデータを示され、ハクサンハタザオが一年を通してどのようにして食害や病害に対抗しているかをお話しくださいました。池田先生は、日本の高山植物相は必ずしも北方からの侵入だけで成立したわけではない事等を DNA の解析結果を中心にお話しくださいました。藤川先生は、フィールドワークの楽しさと大切さを沢山の美しい写真を用いてお話しくださり、亜氷雪帯の植物についてもご紹介くださいました。能城先生は、照葉樹林が人の生活に密接に関わってきたということを経験から出土した材等の解析結果からご説明くださいました。高宮先生は、無融合生殖種を含むシダ植物の複雑な種分類についてお話しくださいました。

ご多忙中にも関わらず快くご講演を引き受けてくださった演者の皆様、遠方より足をお運びくださった参加者の皆様、そして会場の手配をしてくださった大阪学院大学名誉教授の林一彦先生に深く感謝いたします。

## 日本植物分類学会講演会に参加して

五島 美穂（京都大学大学院理学研究科植物学教室）・高橋 晃太郎・中務 篤志（京都大学理学部）

稗田先生は、琵琶湖の侵略的外来種であるオオバナミズキンバイについて講演されました。本植物は生育環境で陸生型、抽水型、浮葉型の 3 つに大きく分けられ形態・萌芽再生の特性に違いが見られること、花粉媒介に外来種であるセイヨウミツバチが大きく貢献していること、水鳥による種子散布の可能性があることなどを防除活動に関連づけて話されました。また、英仏日各国の外来種管理制度の比較を通じて保全活動の展望も示され、非常に興味深く思いました。

本庄先生は、ハクサンハタザオの遺伝子転写量の季節変化についてお話しされました。花芽形成

に関わるある遺伝子ではその転写量の季節変化を過去の特定期間の累積気温でよく説明できることや、遺伝子発現量が昆虫やウイルスとも関わり合いながら季節変化していることなど、植物の季節性リズムについての多角的な研究が勉強になりました。(中務 篤志)

池田先生は、DNA 解析を使った高山植物の起源の解明について、可愛い高山植物の写真を交えながらお話しされました。葉緑体 DNA を使った種内系統解析や地理的構造の解析から、日本の高山植物は 2 回にわたって進入してきたことが示唆されました。また、種によって系統構造が異なることから、起源や進入時期が多岐にわたることも示されました。DNA の解析結果の考察が非常に丁寧で、分子系統解析からこんなにいろいろなことがわかるということを知り、そのストーリーの大きさに驚きました。

藤川先生は、ネパールやミャンマーでの調査について、現地のキャンプの様子や植物の写真などを交えながらお話しされました。植物の形態や生態を観察するにあたって、実際に現地に足を運んで生きた植物を観察するフィールドワークの重要性を感じました。百聞は一見に如かず。標本や図鑑を見るだけでなく、積極的にフィールドに出て見識を深めたいと思いました。

今回の講演会では、DNA を使った解析からフィールドでの観察まで、多様な手法を用いたお話を聞くことができました。一口に「分類学」と言っても植物に対するアプローチは非常に幅広いですが、「植物が好きだ、もっと知りたい」という気持ちは共通しているのだと感じ、今後の研究生活が一層楽しみになりました。(五島 美穂)

能城先生は先史時代から弥生時代の集落における木材利用の痕跡を通して、イチイガシの古環境における分布様式を説明してくださいました。中でも、垂水日向遺跡における地層調査によって、落葉樹林から照葉樹林への変遷を推測できるのは興味深く思いました。最後にイチイガシが九州から東に分布を広げたことを説明されると同時に、現在の生育地との食い違いを指摘され、質疑応答でも様々な意見が出されました。

高宮先生はメシダ科ノコギリシダ属の分類について多種多様な視点から解析され、その集大成をご説明くださいました。分類が困難であるとされてきたノコギリシダ属を染色体、形態、遺伝子情報から種間関係・種内関係を明らかにされました。また、様々な雑種可能性についても検討されると同時に、倍数性を保全する難しさと今後目指すべき保全のあり方についてもご説明くださいました。(高橋 晃太郎)



稗田先生のご講演



本庄先生のご講演



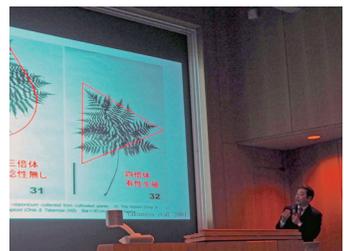
池田先生のご講演



藤川先生のご講演



能城先生のご講演



高宮先生のご講演

## 2019 年度日本植物分類学会野外研修会の報告

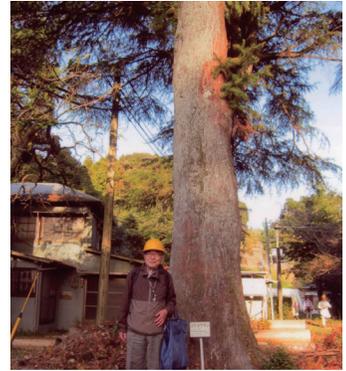
神奈川県横浜市 長谷川義人

千葉県は台風 15 号、19 号とその後の 21 号の豪雨禍で大変な被害が出た。河川も養老川支流の新堀川、夷隅川支流の落合川等の氾濫があったが、東京大学清澄演習林周辺で無事催行することができた。世話役の千葉県立中央博物館 天野誠氏、研修会担当委員 大阪府立大学 西野貴子氏の現地情報収集には大変なご苦労があったことと推察される。また現地案内の東京大学大学院農学生命科学研究科 久本洋子氏には初日、二日目の観覧会ではご案内で大層お世話戴いた。研究三昧の私たちから考えれば被災地の皆様には大変申し訳ない気持である。外房もそうであるが、帰路の内房館山市から安房郡鋸南町の屋根はブルー・シートに覆われていた。

千葉県は旧国名、北から下総（シモウサ）、上総（カズサ）、安房（アワ）であり、房総は上総・安房を含んだ半島である。地史的には 600 万年前以降に神奈川県の丹沢から房総南部に山脈が走り、東海の果てであった房総に植物種の伝播があったと考えられる。このような植物を筆者は「丹沢・嶺岡帯植物群」—カントウカンアオイ・ムカゴネコノメ型分布—と命名して牧野植物同好会誌 MAKINO 19: 6 (1987) に発表した。ミヤマウコギ、カンスゲ、ミヤマカンスゲ、シロバナハンショウヅル、マルバノコンロンソウ、イガホオズキ、ヒメフタバラン（清澄山）、ミヤマウズラ、スハマソウ、マメザクラ（高岩山、石射太郎山ほか）、テンニンソウ、ナガバヤブマオ、キバナアキギリ、ホソバシロソウ（以上 2 種 館山市大山）、オオバチドメ（鴨川市大山）、アキノギンリョウソウ（鶴原）、ハンカイシオガマ（鋸山）、オクモミジハグマ（笠森）タンザワヒゴタイ—房総はノコギリヒゴタイ、ヤマブキショウマ、サガミギク（*Aster trinervius* Don var. *harai* Makino（小学校教師原虎之助 / 実家は山北町の旅館業 / に献名）—房総はキヨスミギク *A. trinervius* subsp. *sugimotoi* Kitamura（杉本順一に献名）、ナンキンナナカマド、アズキナシ、ヤマボウシ、キクバドコロ（以上 4 種鋸山）、ヒメドコロ、アシタカジャコウソウ（愛宕山）、ヒナノキンチャク（富津市高溝）、ミヤマシキミ（丹沢、三浦）—ウチダシミヤマシキミ（清澄）、ウスギオウレン（丹沢）—コセリバオウレン（清澄）などが挙げられる。イブキ、ハイネズなど多数があるが、省略する。

房総は間氷期に古東京湾が深く侵入し、神奈川県平塚以東の古相模湾と海域が合流し、約 10 万年前には房総南部と三浦半島は一つの島になった時期があった。地史的には最近になって東京湾口が陥没（不等沈下）し、二つの半島になった。この地域はフィリピン海プレートが本州弧（ユーラシアプレート）に対し、地下 10,000m の処で潜り込みをされていて年速約 5cm と謂われる。地史的には房総・三浦はこの影響で隆起傾向である。下総（北総）は有史以降も湿地帯で内陸は谷津田の発達が良い。現在も印旛沼、手賀沼などササバモ、ガシャモク、インバモ、ミズアオイなど水草の種が多く、湿地性植物が豊富である。下総は湿地帯でそのため昔の交通は三浦半島（相模）側から房総へ上陸し下総・常陸へ向かったと謂われている。

清澄演習林はこの二国の国界から上総側に広く面積を占める。アプローチは JR 外房線安房小湊駅（特急では鴨川駅）か JR 内房線木更津駅乗り換え久留里線終点の亀山駅となる。千葉演習林には清澄（キヨスミ）、郷台（ゴウダイ）、札郷（フダゴウ）の三か所の作業所があり、宿泊は大変設備のいい清澄学生宿舎であった。宿舎のすぐ上には日蓮大上人の祖師堂・本堂がある清澄寺（寺域 35,000 坪）となり、清澄の千年杉など自然がよく保たれている。寺のすぐ裏手が清澄山の最高処「妙見山」383m である。（註：別国名アワ阿波は徳島県。千葉県のアワ安房にはアワチドリほか 1 変種のみ）宿舎に併設された資料館には材の見本や房総の山林従事者の道具・民具が収集され参考になったが、松野礪（はざま）(1847 ~ 1908) の事績が記され東大農学部林学科の前身であった『山



著者の長谷川氏  
演習林に植栽されている  
コウヨウザンの前にて  
(撮影：三樹和博氏)

林学校』を開設した方で、本多静六先生（1866-1952、後の東大林学科教授）らがここに学んだ。ご承知のように本多先生の持論は研究者として針葉樹を植林するならば、土地の保水性を考えれば広葉樹との混交林でなければならないとした。官有林・民有林を問わず山林行政がこの識見を取り入れていれば、台風・大雨による下流域の被害はもっと軽減されていたと考えられる。日本全国の台風被害の大きさを考えれば、経済性を重視した林木生産優先の山々を眺め思うことである。

中井猛之進（東大植物分類学四代目教授）はその著『東亜植物図説』『房州のヤマザクラ類』（1949）で謂う、「清澄山の東大演習林を除いて全房州は植物学的には未知の土地（Terra incognita）である。」と。全房州は全房総でなければならない。併し現在、『千葉県植物誌』（2003）によってこのフロラは俯瞰できる。沼田真、大場達之ほか千葉県立中央博物館の諸氏、千葉県の植物学先達と地域研究者諸兄のお蔭である。この地域は1958（S.33）年8月1日指定の『南房総国定公園』であって、富津岬から大東岬までを結ぶ以南の面積56.6km<sup>2</sup>の土地である。海岸線は190kmの長さがある。房総には千葉県の6か所の県立公園の内、5か所が含まれる。「笠森鶴舞」、「養老溪谷奥清澄」、「高岩山」、「富山（トミサン）」、「嶺岡山系」の各県立自然公園である。他にも房総には県民の森、市民の森に指定された数か所がある。現在は国有林・県有林・民有林であるが、昔の国有林は官林と呼ばれ、この地域にも旧夷隅郡及川村「筒森官林」、旧君津郡亀山村「奥山官林」があった。東大清澄演習林の範囲は後者であろう。

房総半島は広く交通の便は極めて悪い。山々は低くても河川が砂岩・泥岩を削り深い谷を造り集落は孤立して、半島を縦に貫く道路は有っても横を結ぶ道は極めて少ない。鉄道もJRの他は、小湊鉄道（五井～上総中野）、いすみ鉄道（上総中野～大原）があるのみで、バス路線は植物調査利用ができない本数である（日東交通バス、JRバスなど）。

研修会の初日（11月1日）は外房線JR安房鴨川駅に12:00に集合してすぐにマイクロバスで安房天津を、通過して清澄へ向かった。ほぼ全員が「特急わかしお」を利用されたようであった。清澄寺のすぐ下にある東大演習林の学生宿舎に荷物を置き、すぐに千葉県立中央博物館 天野誠先生のご指導で演習林作業所構内の観察を始める。キヨスミツバツツジ（植栽）、バクチノキ、コショウノキ（植栽）、キヨスミギク、カタヒバ、センボンヤリ、テイカカズラ、ホオノキ、クサコアカソ、スタジイ、マテバシイ、アキノキリンソウ、キヨスミギボウシ、カズサヤマアザミ、トネアザミ（天野氏イガアザミ）、ホシダ、ササガヤ、ヤマユリ、マルバウツギ、ホンコブナグサ（ノゲコブナグサ館山市波左間にもある）、構内を出て清澄寺へ向かう。寺の山門をくぐり「清澄の大スギ」の前に立つ。大変大きい、根廻り太さca. 17.5m、目通りca. 15m、樹高ca. 47mあり1924年、国の天然記念物になった。イワヒメワラビ、舍利塔のある広場で帰化植物のコシカギクを天野氏は解説した。夕食前に天野誠先生の講義が別棟の講義室で行われた。バンクスの植物画の世界に関する話であった。

三重県の会員 山脇和也氏の採集品にシロヨメナがあり、この地の全てがキヨスミギクではないことが、判明した。前者は毛があってもツルツルしていて後者のようにザラついた感触がない、そうしてキヨスミギクは葉柄もはっきりしている。別にノコンギクもあるであろう。天野氏は静岡県（遠江）秋葉山のアキハギクと清澄山のキヨスミギクは多少ニュアンスが異なると説明された。

翌11月2日午前は元清澄山方面の林道、構内から観察が始まり、オニシバリ、タチシノブ、イズノシマダイモンジソウ、ジュウモンジシダ、ミゾシダ、ハコネシダ、ケイワタバコ、ヒガンナムシグサ、ミツデウラボシ、マツザカシダ、ナキリスゲ、コゴメスゲ、ケスゲ、ヒメカンスゲ、門外へ。サカキ、アカガシ、メダケ（キヨスミメダケ）、ヒサカキ、シバヤナギ（イシヤナギ）、アズマイバラ、ハコネウツギ、ヤマモモ、ウラジロガシ、タブノキ、アセビ、フジ、ウツギ、ミツバアケビ、キヨスミイボタ（三浦半島にはない、ミウライイボタは両半島にある）、元清澄山へ4.7kmの標識。マルバツルグミ（中井1916）、ウラギンツルグミ（初島1934）*Elaeagnus × reflexa* C. Morren et Decne.（ツルグミ×ナワシログミ）註：当初、天野氏の解説は後者の和名。国内産の常緑グミはツルグミ、オオバグミ、ナワシログミの3種であり、アカバグミ（ツルグミ×オオバグミ）、オオナワシログミ（オオバグミ×ナワシログミ）、マルバツルグミの3雑種がある。キヨスミギボウシ（天野氏の解説では千葉県のギボウシ属は4種）、リンドウ、ミヤマウスラ、タマアジサイ、ゼンマイ、クマワラビ、オサシダ、クサ

アジサイ、モミジイチゴ、カクレミノ、ウラジロ、ミヤマカンスゲ、ツクシショウジョウバカマ、シロジズスゲ (*Carex kiyozumiensis* Akiyama、現在はアオヒエスゲの変種、会員のスゲ属研究家 織田二郎氏の目が輝く。オオバウマノスズクサ、ラセイタタマアジサイ、オオバノイノモトソウ、ナチシダ、テリハヤブソテツ、ヤツデ、ナガボハナタデ、クマノミズキ、レモンエゴマ、ナガバヤブマオ、ヤマミズ、カンスゲ、サラシナショウマ (花)、マツカゼソウ、イロハモミジ、ヤブニッケイ、イズセンリョウ、コアカソ、イヌトウバナ、往路を戻る。リュウキュウハゼ、アキノタムラソウ、トウゲシバ、シャシャンボ、ウラジロマタタビ、(宿舎で昼食) 午後は初日山、天拝園、麻綿原高原方面の林道 ノキシノブ、サルトリイバラ、モミ、カキドオシ、ススキ、アツバスマシ、キヨズミヤブマオ (バス停横の崖地、ラセイタソウ節 佐竹義輔先生の《Boehmeria Japonica》 Journ. Fac. Sci. Imp. Univ. Tokyo sect. III Bot. Vol. IV Part 6- 496 Fig. 18 & 19(1936). 一見、神奈川県逗子市、横浜市に局所的に多いコヤブマオにも似るが、別 taxa と考える。筆者は生前の佐竹先生と親しく、この書は Gen. *Boehmeria* を調べる時の Bible である。) リョウメンシダ、シラネセンキュウ、アイアスカイノデ、イワヒメワラビ、ヤブムラサキ、ムラサキシキブ、コバノカナワラビ、バリバリノキ、キヨスミザサ (三樹和博氏)、アカショウマ、リンドウ、ナツツタ、シキミ、カントウカンアオイ (織田二郎氏発見・筆者の丹沢-嶺岡帯植物群の一種) シロジズスゲ、ヒメカンスゲ、ハイニシキソウ (天野誠氏、帰化品)、シラキ、イワガラミ、ニガイチゴ、コバムラサキシキブ (葉は小さく、葉色は淡い)、キッコウハグマ (花)、ツワブキ (花)、ヒメジソ、イズノシマダイモンジソウ (花)、ガマズミ、オサシダ、サラシナショウマ (花)、ナガバノコウヤボウキなどで書き落としも多い。構内に戻り植栽のヒメコマツ (県内房総地域に稀)、マルバチシャノキ (鴨川市天津町貫入松ヶ浜に自生) を見る。

この日も天野誠先生の DNA を用いた APG IV system 分類の講義があった。大変に関心の深い話題である。宿舎へ戻って採集品の整理をする。筆者の部屋では秋田県湯沢市の松田義徳氏の採集品が満遍なく収集され最も多い。

最終日は海岸が予定され 9:00 に宿舎をマイクロバスで出発し、鴨川シーワールド前を通過し国道 128 号・410 号を通過して千葉県最南端の野島崎へ向かう。この辺りは温暖で花卉栽培と漁業が主な産業である。加茂川地溝帯の平野部は所謂、長狭 (ナガサ) 米の米どころで昔は寿司米として賞揚された。また「大山千枚田」は有名である。現在は「ふさこがね・房黄金」「ふさおとめ・房乙女」の銘柄を作付けしている。南行し太海、江見、和田浦、南三原、千倉町を通過、この奥の大字南朝夷字大井倉にヒロハドウドンツツジ、カリガネソウ、シラン、ソクシンラン、サツマズゲがあるのは珍しい。

また南房総市丸山町石堂寺周辺は環境の佳い地域でムヨウラン、ホクリクイヌワラビ、シンミズヒキ、ヒカゲワラビ、ハチジョウカグマ、オオバヤドリギ (館山市大網、舎那院にもある (山井廣氏案内)) など。鴨川市平塚の愛宕山 (408m) は千葉県の最高点で山頂は航空自衛隊嶺岡レーダー・サイトである。この水源地の谷にはミヤマウコギ、ナツエビネ、シロヤマシダ、タニイヌワラビ、キヨスミギボウシ、アシタカジャコウソウ (タニジャコウソウに似る)、門外にはミウライボタがある。旧七浦村白間津を過ぎ白浜町へ入る。この辺りも台風被害のブルー・シートの屋根が目立つ。乙浜、塩浦 (ここにはモクレイシ、オオアカウキクサがある。恩師の易変遺伝子研究家・笠原基知治先生と早春、スイセン調査に何回も訪れた)、この笠原先生と 1951 (S.26) 年 7 月 22 日茂原の湿性植物を見て八積・一宮海岸でヒメキンボウゲ、オオクグをみて、再び電車で天津小湊駅から清澄山に入った。野営地の傍らに木こりが下した太枝にセキコク、マメズタランが沢山ついていた。その後も伊藤洋先生、演習林の糟谷由助氏とご一緒し、イワヤナギシダ、オオバライチゴ、キヨスミイボタ、コショウノキ、アオモジ (逸出)、クロバイ、コセリバオウレン、ウチダシヤマシキミなどを見た。

原を通過し、島崎集落に入ると目の前に野島崎灯台が聳える。ツルソバ、スイカズラ、オオバグミ、オオバイボタ、シャリンバイ (栽)、トベラ、サルトリイバラ、ラセイタソウ、カイガンマサキ、イソギク、コウボウシバ、ソナレムグラ、ハマウド (切ると白い汁が出る、アシタバは黄汁が出る)、ツワブキ、タイトゴメ、ヤツデ、イヨカズラ、ノコンギク、マルバアキグミ、ハマエンドウ、ハマヒルガオ、コウボウムギ、ハマエノコロ、ネコノシタ、ハマボッス、イソアオスゲ、エノシマススキ、ハマ

コウ、ハマヒサカキ（栽）、オオキバナカタバミ（帰化）、ハチジョウススキなど海岸植物が見られた。再びバスで長尾川を渡り、白浜町平砂浦へ向かう。旧神戸（かんべ）村道の駅「南房パラダイス」で下車、海浜へ向かう。ハマゴウ、マルバアキグミ、カイガンマサキ、サルトリイバラ、トベラ、ハチジョウススキ、ケカモノハシ、コウボウムギ、オニシバ、コマツヨイグサ、ヒロウドテンツキ、ハマニガナ、ハマボウフウ、ハイネズ、ヒメヤブラン、オオバイボタ、クロマツなど、ここは平砂浦の名前のとおり湾曲した長い砂浜である。帰路は多分国道 410 号を利用して真倉へ出て解散予定地 JR 館山駅に予定の 12:00 に到着した。初日と最終日のバスは鴨川日東交通バスをチャーターした。最終日はやや長距離であったが、女性ドライバーの安全運行に感謝したい。内房線の特急は待ち時間長く全員が各駅電車となった。

扱て、キヨスミ *KIYOSUMI* を冠する名前に二通りがあり、一方ではキヨズミ *KIYOZUMI* で、名称に統一性がない。清澄・清澄山は地元では *KIYOSUMI* が正しい読みと考えるが、学名・和名俱に記憶に困難を生じるほどに混乱している。これには日本人の古くからの習性で二語が複合する際に、下に来る語の初めの清音が濁音に変わること。これを「れんだく・連濁」と言い、例として「みかづき」の「づき（月）」、「じびき」の「びき（引）」の類、出典『広辞苑』（1977）第 2 版（岩波書店。この件は 1330～1331 年になった吉田兼好『徒然草』の第百六十段に【行法（ぎょうぼう）も『法ほう』の字をすみていふ、悪（わる）し。濁りて。と清閑寺の僧正（道我どうが）おほせらりき。】があり、旧くからこの習慣があった。古典に通じていた東大の中井猛之進教授あたりが連濁語法を使用したのではないかと推察する。

#### 清澄山または房総周辺で記載された taxa とキヨスミ、キヨズミを冠する植物名

- キヨスミイボタ（キヨズミー） *Ligustrum tschonoskii* Decne var. *kiyozumianum* (Nakai) Ohwi 註：房総が主産地であるが、中井はその著で常陸を記した。筆者は筑波山で採集している。
- キヨスミウツボ（キヨズミー） *Phacellanthus tubiflorus* Siebold et Zucc. 註：本会で主催した北海道研修会（北大、東隆行氏）では札幌市南区八剣山にも本種を実見した。
- キヨスミギク（アキハギク） *Aster sugimotoi* Kitam. A. *trinervius* Don subsp. *sugimotoi* Kitamura 註：杉本順一先生に献名。1957 年 09 月 29 日静岡の大村敏朗氏に竜爪山を案内戴き、夜、杉本順一先生をお訪ねした。粉山泰一、大村敏朗、浅井康弘、長谷川義人の 4 人であった。
- キヨスミギボウシ（ハヤザキー） *Hosta kiyozumensis* F.Maekawa
- キヨスミコケシノブ *Hymenophyllum oligosorum* Makino 愛知県三河地方で実見した。
- キヨスミヒメワラビ（シラガシダ） *Dryopsis maximowicziana* (Miq.) Holttum et Edwards
- キヨスミミツバツツジ *Rhododendron kiyosumense* (Makino) Makino 註：神奈川県での発見は筆者でそれは箱根外輪山三国山であった。愛鷹山・竜爪山にある。
- キヨズミメダケ *Pleioblastus kiyosumisimonii* Koidz.
- シロジズスゲ *Carex subdita* Ohwi var. *kiyozumiensis* (Akiyama) Akiyama 註：織田二郎氏が参加されて今回も各処に確認した。清和県民の森にも多い。
- キヨズミイノデ *Polystichum* × *kiyozumianum* Sa. Kurata
- キヨズミオオクジャク *Dryopteris namegatae* (Sa. Kurata) Sa. Kurata
- キヨズミオリヅルシダ *Polystichum lepidocaulon* (Hook.) J.Sm. form.
- キヨズミザサ *Sasa kiyozumiana* Nakai 註：ミヤコザサ節に所属。小形のササ。 註：元日本竹笹の会 三樹和博氏がアップीलした株は本種と考えられる。
- キヨズミシダ（ヒメカナワラビ） *Polystichum tsus-simense* (Hook.) J.Sm.
- キヨズミメシダ *Deparia* × *kiyozumiana* (Sa. Kurata) Shimura
- キヨズミヤブマオ *Boehmeria kiyozumensis* Satake 註：一見コヤブマオに似るが別種、実見。
- フトホヤブマオ *Boehmeria pachystachya* Satake Prov. : Awa, Mt. Kiyozumi (types in TI) 千葉県  
の旧国名、上総・安房を Type locality とする植物 (*Boehmeria* は佐竹による) 註：北総を除く。
- ハマヤブマオ *Boehmeria arenicola* Satake 安房白浜町乙浜、房総鋸山、(相模は逗子市小坪)

ボウシュウネザサ *Pleiblastus asanoi* Nakai Prov. Awa : 安房郡富崎村、安房郡白浜町、鴨川市  
 註：元県立長狭高校教師浅野貞夫氏（晩年は泉自然公園）に献名された。

ボウシュウメダケ *Pleiblastus boushyuensis* Koidz. Prov. Awa : 鋸山。

テイフメダケ *Pleiblastus sadawoanus* Koidz. Prov. Awa : 安房郡北三原村 註：浅野貞夫氏

ヒガンナムシグサ *Arisaema aequinoctiale* Nakai et F. Maekawa 註：房総には大変に多い種。一見、ミミガタテンナンショウに似る。併し邑田仁先生の『日本のテンナンショウ』によれば分布は関東南西部（筑波山・妙義山）、山梨、長野、東海、本州西部、四国。

ノコギリヒゴタイ *Saussurea sinuatoidea* Nakai var. *bosopeninsularis* Ohba et Yokko Kimura 註：タンザワヒゴタイ変種。基準産地：鋸山。丹沢・嶺岡帯植物群の一種。

カズサヤマアザミ *Cirsium microspicatum* Nakai var. *bosopeninsulae* T. Ueno 清澄山、市原市民の森など、註：アズヤマアザミの頭状花に花梗のあるもの、大場達之、上野達也両氏が識別した。

カズサザクラ *Cerasus speciosa* × *C. jamasakura* 註：房総には極めて豊産する。

アワチドリ *Ponerorchis graminifolia* Rchb. fil. var. *suzukiana* (Ohwi) Seo (ウチョウラン変種) 註：千葉県のアワチを冠する種は本種のみ。自生品は好事家に採取され、自然状態では絶滅と謂われる。横浜金沢区富岡の春及園園主鈴木吉五郎氏に献名された。前川文夫先生の『原色日本のラン』に協力され、特に希少植物の栽培、ラン科植物、食虫植物、熱帯魚の輸入など栽培や産地の情報に詳しく、屋久島からオタクミツツジを世に出した。没後、園は閉鎖された。

### 三石山その他

ミツイシイノデ *Polystichum* × *namegatae* Sa. Kurata (カタイノデ×サイゴクイノデ)

ボウシュウマサキ *Euonymus japonicus* Thunb. var. *obovatus* Nakai Prov. : Awa 館山市坂田（バンド）、筆者は洲崎で採集。T. Nakai in Bull. Nat. Sci. Mus. Tokyo 27: 31(1949) 註：葉のきわめて大きいカイガンマサキの変種。葉の大きいものは円く径 10cm 前後になる。

浅学菲才にも拘らず報告をとのことで、清澄山その他この地域は数十回訪問したが、却ってなにを書いてよいのやら自縄自縛に陥り気ままな一文になってしまった。現地でお世話になった参加の会員諸兄のお名前を記し、また宿舎での食事のお世話をしてくださった羽若部様に感謝申し上げ、報告の不備にお詫びをして擱筆する。

出席者（名簿順）

中村建爾、片桐丘充、飯田順子、渡部教行、三樹和博、西野友子、松田義徳、中村直樹、宇那木隆、織田二郎、川辺龍太郎、長谷川義人、山脇和也、久本洋子、天野誠、西野貴子

観察コースの案内役・久本洋子（東大清澄演習林）、ご指導と講義・天野誠（千葉県立中央博物館）の二先生には特に総合的にお世話になった。深甚なる感謝の気持ちと共に、厚くお礼申し上げます。



清澄寺の舍利塔の前で  
快晴の空のもと参加者一同



台風による倒木が  
林道を塞いでいる様子



湿った岸壁一面に咲く  
イズノシマダイモンジソウ

ニュースレター誌面の都合上、文末の植物リストの大部分や参考文献を中心に、かなり著者ご自身に削除いただきました。削除前の原稿は、著者の博識洽聞ぶりが遺憾なく発揮された大作で、そのまま掲載できなかつたことをお詫び申し上げます。（野外研修担当委員 西野 貴子）

## お知らせ

## 日本植物分類学会第19回大会 岐阜事務局からのお知らせ

第19回大会 事務局 川窪伸光・須山知香（岐阜大学）

岐阜大会へ、多数の参加申込をいただき誠にありがとうございます。2月3日現在、参加申込者は、大会事務局の予想を遙かに超える210名、また発表登録は、121件（口頭44件、ポスター77件）となりました。大会事務局は喜びを感じながら、みなさんのご期待にそえるように細心の注意をもって準備をすすめております。そこで大会前の最終NLとして以下の3点をお知らせいたします。



日本植物分類学会第19回大会  
ロゴマーク

1. 口頭発表時間の短縮のお願い

日本植物分類学会の大会の良き特徴のひとつに、1つの会場で講演を聴き議論できることがあります。それを維持するために、発表時間の短縮をお願いいたします。

■ 新たな発表時間：講演10分間、質疑応答2分間、合計12分間 ■

大変心苦しい提案となりましたが、ご理解をよろしくお願いいたします。

2. ポスターの貼り付け時間

ポスターは、3月1日（日）の13:00までに、ポスター会場の指定された場所に掲示をお願いします。特にポスター賞の審査は、3月1日（日）の夕方に行われますので、時間厳守をお願いします（発表者は講演する必要はありません）。

3. 公開シンポジウムのご案内

大会初日3月1日の午後に、市民公開シンポジウムとして以下をご用意いたしましたので、奮ってご参加ください。また、非会員の方も事前申し込み無しで、無料でご参加いただけますので、みなさまの周りの方々もお誘いください。

植物誌の科学：身近な植物から世界の植物まで網羅する挑戦

～岐阜県植物誌から植物の世界を見る～

【日時】2020年3月1日（日）13時～16時30分

【場所】岐阜大学 柳戸キャンパス 講堂（岐阜市柳戸1-1）

【内容】日本は世界屈指の植物誌大国です。日本人は、花草木や虫を風流として楽しむ文化をもち、古くから自然事物を和歌や絵画として記載してきました。そして郷土の自然を映し出す植物誌にいたっては、それこそ郷土誌として、児童生徒教育資料として、そして純粋に学術的調査研究の成果として、日本中の大小さまざまな地域ごとに出版されてきました。今回のシンポジウムは、そんな植物誌の科学的理念と将来にわたる学術的役割を、野外で植物調査を精力的に行ってきた研究者のみなさんの講演を通して再検討します。

1. 主催者挨拶 森脇久隆（岐阜大学長）
2. シンポジウム趣旨説明 川窪伸光（岐阜大学）
3. 「植物誌調査の新しい方法：九大新キャンパスでの全種調査から屋久島へ、そして東南アジアへ」 矢原徹一（九州大学）
4. 「なぜ身近な植物が絶滅するのか？：標本が語る過去と今」 藤井伸二（人間環境大学）
5. 「岐阜県植物誌完成までの道のりと岐阜県に特徴的な植物」 高橋 弘（岐阜大学名誉教授）
6. 「岐阜県植物誌はプロとアマが蓄積した植物標本によって完成した」 福岡義洋（名古屋市立楠西小学校）
7. 「地方大学ならではの植物標本庫生残り戦略」 須山知香（岐阜大学）
8. 総合討論

また、シンポジウム関連展示として、以下を準備しています。合わせてご観覧いただければ幸いです。

会場： 岐阜大学図書館 2F エントランスホール

会期：2020年3月1日（日）～3月3日（火）

1. 日本全国各地の植物誌を展示

会期：2020年2月28日（金）～3月12日（木）

2. 岐阜大学学術アーカイブズ 「標本を読み解いて植物を知ろう」
3. 岐阜県博物館 「植物線画の世界」
4. 美濃加茂市民ミュージアム 「加茂地区の生物多様性調査から（仮）」
5. 岐阜大学環境サークル G-amet（ジャメット）  
「岐阜大学自然保存地の50年と学生主体の生物多様性事業の挑戦」

### 【お問い合わせ】

日本植物分類学会第19回大会 岐阜大学事務局

〒501-1193 岐阜市柳戸1-1 岐阜大学応用生物科学部

電話：058-293-2855 電子メール：jsps19@gifu-u.ac.jp

ホームページ：https://www1.gifu-u.ac.jp/~jsps19/

（お問い合わせの場合には、できるだけ電子メールをお使いください。メールのタイトルは、「大会問合せ」として下さい。）

## 2020年度総会のお知らせと審議事項

庶務幹事 海老原 淳

3月2日（月）に岐阜大学で開催される総会において、以下の議案が審議されます。会員各位の参加をお願いします。

1. 2019年度事業報告案（13ページ参照）
2. 2019年度決算案（16ページ参照）
3. 2020年度事業計画案（15ページ参照）
4. 2020年度予算案（18ページ参照）
5. その他

1. 2019年度事業報告案

### (1) 集会等の開催

- ・学術集会、講演会、研修会

年次学術集会（日本植物分類学会第18回大会：3月6～9日 八王子市）を開催した。

2019年度講演会を開催した（12月14日（土）：大阪学院大学）。

2019年度野外研修会を開催した（11月1～3日、千葉県鴨川市東京大学千葉演習林）。

- ・総会、評議員会

評議員会を1回（3月6日 八王子市）開催した（ニュースレター No. 72 で報告）。

年次総会を年次学術集会に合わせて開催した（3月8日 八王子市）。

### (2) 出版物の刊行

- ・学会誌の発行  
英文誌『Acta Phytotaxonomica et Geobotanica』第70巻1～3号（計3冊）を発行した。  
和文誌『植物地理・分類研究(The Journal of Phytogeography and Taxonomy)』第67巻1～2号（計2冊）を発行した。
- ・ニュースレター  
『日本植物分類学会ニュースレター』72～75号（計4冊）を発行した。

### (3) 委員会活動

以下の委員会を組織し、目的に沿って活動を行った。

- ・絶滅危惧植物専門第一委員会（藤井伸二委員長）  
環境省第5次レッドリスト改定にむけ、絶滅確率の計算のためのデータクリーニング作業を進めた。また、各都道府県の主任調査員・調査員の協力の下に補完調査を行った。  
※全体のスケジュール：2017～18（現地調査）、2019（補完調査）、2020-21（ランク評価）、2022-23（原稿執筆）、2024（RDB公表）。
- ・絶滅危惧植物専門第二委員会（樋口正信委員長）  
コケ類、藻類、菌類、地衣類の各グループの委員及び調査協力者により、環境省の第5次絶滅危惧植物の補足調査（絶滅のおそれのある野生生物の選定・評価に係る現地調査）を実施した。来年度はチェックシートを作成する予定である。
- ・植物データベース専門委員会（大西亘委員長）  
国内の植物分類学系学術誌の情報整理を進めた。旧植物地理・分類学会刊行の『北陸の植物』『植物地理・分類研究』のバックナンバーについて、当学会によるweb公開を念頭にPDF化を進めた。
- ・学会賞選考委員会（瀬戸口浩彰委員長）  
第19回日本植物分類学会賞の受賞者5名（学会賞2名、若手奨励賞3名）を決定した。（ニュースレター No. 76 で報告予定）
- ・論文賞選考委員会（ニュースレター No. 72 で報告）（田村実委員長）
- ・大会発表賞選考委員会（ニュースレター No. 73 で報告）（藤井伸二委員長）
- ・ABS 問題対応委員会（村上哲明委員長）  
委員会全体としての活動は特に行わなかったが、委員長の村上がAMEDからの予算を用いて本学会会員のABS対応を支援した。現在、日本国政府が遺伝資源の提供国措置の検討を始めているようであるが、そのようにすると、我々日本人研究者の負担が増え、海外における野生生物の調査・研究許可の取得がより困難になることを本学会会員の皆さまにご理解いただきたい。
- ・国際シンポジウム準備委員会（池田博委員長）  
2019年度は開催がなかったため、特に活動は行っていない。
- ・国際命名規約邦訳委員会（永益英敏委員長）  
『国際藻類・菌類・植物命名規約（深圳規約）2018日本語版』（ISBN978-4-8326-1052-1）を2019年8月30日に北隆館より発行した。
- ・標本問題対応委員会（ニュースレター No. 75 で報告）（田中伸幸委員長）
- ・研究・普及推進委員会（黒沢高秀委員長）  
委員を決定し、発足した。「植物分類学の将来の発展と普及に関する委員会」による報告（植物地理・分類研究 67: 165-178, 2019）で挙げられた課題を参考に、2020年第1回評議員会までに具体的な活動内容について議論を進める予定である。

### (4) 表彰

- ・日本植物分類学会賞（学会賞・奨励賞）の授与を行った（ニュースレター No. 72 で報告）。
- ・日本植物分類学会論文賞の授与を行った（ニュースレター No. 72 で報告）。
- ・日本植物分類学会大会発表賞の授与を行った（ニュースレター No. 73 で報告）。

## (5) 国内外の関係学術団体との連携・協力

- ・国内学会連合等への参加・連携を行った: 日本学術会議、自然史学会連合、日本分類学会連合など。
- ・ The Korean Society of Plant Taxonomists (KSPT)、および Taxonomy and Evolution Division, the Botanical Society of China (BSC) 等と連携する。

## (6) その他

- ・学会刊行物のバックナンバー等の販売と整理を行った。
- ・当年度発行の『Acta Phytotaxonomica et Geobotanica』と『植物地理・分類研究』の論文 PDF を J-STAGE で公開した。
- ・植物分類学関連情報（学術集会、研究動向、出版物、公募）を収集し、ニュースレター、ホームページ等で提供した。
- ・学会刊行物の国内外の研究機関への寄贈と交換を行った。

2019 年度決算案 → 16 ページに掲載

## 2020 年度事業計画案

## (1) 集会等の開催

- ・学術集会、講演会、研修会  
年次学術集会（日本植物分類学会第 19 回大会：2 月 29 日～3 月 3 日 岐阜市）を開催する。  
2020 年度講演会を開催する。  
2020 年度野外研修会を開催する。
- ・総会、評議員会  
評議員会を開催する（2 月 29 日）。  
年次総会を年次学術集会に合わせて開催する（3 月 2 日）。

## (2) 出版物の刊行

- ・学会誌の発行  
英文誌『Acta Phytotaxonomica et Geobotanica』第 71 巻 1～3 号（計 3 冊）を発行する。  
和文誌『植物地理・分類研究 (The Journal of Phytogeography and Taxonomy)』第 68 巻 1～2 号（計 2 冊）を発行する。
- ・ニュースレター  
『日本植物分類学会ニュースレター』76～79 号（計 4 冊）を発行する。

## (3) 委員会活動

以下の委員会を組織し、目的に沿って活動する。

- ・絶滅危惧植物専門第一委員会
- ・絶滅危惧植物専門第二委員会
- ・植物データベース専門委員会
- ・学会賞選考委員会
- ・論文賞選考委員会
- ・大会発表賞選考委員会
- ・ABS 問題対応委員会
- ・国際シンポジウム準備委員会
- ・標本問題対応委員会
- ・研究・普及推進委員会

## (4) 表彰

- ・日本植物分類学会賞（学会賞・奨励賞）の授与を行う。
- ・日本植物分類学会論文賞の授与を行う。
- ・日本植物分類学会大会発表賞の授与を行う。

## (5) 国内外の関係学術団体との連携・協力

- ・国内学会連合等への参加・連携を行う：日本学術会議、自然史学会連合、日本分類学会連合など。
- ・The Korean Society of Plant Taxonomists (KSPT)、および Taxonomy and Evolution Division, the Botanical Society of China (BSC) 等と連携し、韓国で開催予定の国際シンポジウムに若手研究者派遣を行う。

## (6) その他

- ・学会刊行物のバックナンバー等の販売と整理を行う。
- ・当年度発行の『Acta Phytotaxonomica et Geobotanica』と『植物地理・分類研究』の論文 PDF を J-STAGE で公開する。
- ・植物分類学関連情報（学術集会、研究動向、出版物、公募）を収集し、ニュースレター、ホームページ等で提供する。
- ・学会刊行物の国内外の研究機関への寄贈と交換を行う。

2020 年度予算案 → 18 ページに掲載

## 2019 年度決算報告案 一般会計（2019.12.31 現在）

収入の部	単価	数	予算	決算	予算との差異	
会費						
通常（一般）	7,000	758	5,306,000	5,084,240	△ 221,760	注 1
通常（学生 / 海外）	3,000	98	294,000	214,000	△ 80,000	注 1
団体会員	8,000	20	160,000	176,000	16,000	注 1
APG カラーチャージ			250,000	450,000	200,000	
バックナンバー販売			120,000	92,000	△ 28,000	
利息			100	51	△ 49	
雑収入			50,000	305,940	255,940	注 2
小計			6,180,100	6,322,231	142,131	
支出の部						
大会補助費			100,000	0	△ 100,000	
講演会補助費			70,000	45,572	△ 24,428	
出版物印刷費						
APG vol.70 (1,2,3)	930,000	3	2,790,000	2,643,712	△ 146,288	
植物地理・分類研究 vol.67 (1,2)	700,000	2	1,400,000	1,223,010	△ 176,990	
ニュースレター No.72-75	55,000	4	220,000	187,896	△ 32,104	
学会誌編集補助費			250,000	247,869	△ 2,131	
英文校閲費			50,000	50,000	0	
出版物送料						
APG 送料	100	3,100	310,000	327,681	17,681	
和文誌送料	100	2,100	210,000	209,480	△ 520	
NL 送料	90	4,000	360,000	264,005	△ 95,995	注 3
会議費			0	0	0	
学会賞表彰経費			50,000	36,000	△ 14,000	
自然史学会連合負担金			20,000	20,000	0	
分類学会連合負担金			10,000	10,000	0	
事務局管理費						
消耗品費			50,000	8,455	△ 41,545	
交通費			50,000	15,000	△ 35,000	
封筒等印刷費			0	184,478	184,478	注 4
通信費（小包手数料を含む）			50,000	44,165	△ 5,835	
手数料・その他			15,000	18,212	3,212	
自動振替集金代行基本料			3,240	3,240	0	
自動振替口座確認手数料	130	160	20,800	2,205	△ 18,595	注 5
レンタルサーバー使用料			27,000	26,244	△ 756	

国際シンポジウム積立金	200,000	200,000	0
予備費	0	0	0
合計	6,256,040	5,767,224	△ 488,816

単年度収支	△ 75,940	555,007	630,947
前年度からの繰越金	5,151,913	5,151,913	0
次年度への繰越金	5,075,973	5,706,920	630,947

- 注1：会員数の変動と集計時点で未収の会費があるため。  
 注2：日本植物分類学会第18回大会繰越金（172,759円）、著作物複製使用料（129,725円）。  
 注3：NL75を植物地理・分類研究67(2)と同時発送したため。  
 注4：来年度の封筒を印刷したため。  
 注5：自動振替口座確認手数料にかかる消費税分。本体価格分（120円）は会員負担。

## 2019年度決算報告案 特別会計〔絶滅危惧種調査〕（2019.12.31現在）

収入	予算	決算	予算との差異
前年度繰越金	7,770,192	7,770,192	0 注1
絶滅危惧種管束植物の調査委託費（2019年分）	0	0	0
レッドリスト改訂のための調査解析委託費（2019年分）	3,600,000	3,600,000	0 注2
合計	11,370,192	11,370,192	0
支出			
絶滅危惧種管束植物の調査費（2018年分）	3,500,000	2,900,000	△ 600,000 注3 注6
絶滅危惧種管束植物の調査に関連する雑費（2018年分）	50,000	405,616	355,616 注4 注6
事務経費（2018年分）	4,220,192	2,200,000	△ 2,020,192 注5 注6
レッドリスト改訂のための調査解析費（2019年分）	3,600,000	3,110,000	△ 490,000 注7
事務経費（2019年分）	0	7,280	7,280 注8
次年度への繰越金	0	2,747,296	2,747,296 注9
合計	11,370,192	11,370,192	0
単年度収支	0	0	0

- 注1：2018年度（環境省の会計年度；2018年4月1日～2019年3月31日）委託費による繰越金。  
 注2：2019年度（環境省の会計年度；2019年4月1日～2020年3月31日）委託費。  
 注3：2018年度内（環境省の会計年度；2019年3月31日まで）に支出した絶滅危惧種管束植物の調査費。  
 注4：2018年度内（環境省の会計年度；2019年3月31日まで）に支出した絶滅危惧種管束植物の調査費の振込手数料。  
 注5：2018年度内（環境省の会計年度；2019年3月31日まで）に支出した絶滅危惧種管束植物の調査にかかる事務経費。  
 注6：一部の都道府県の主任調査員の報告書が2018年度末までに未提出だったため、委託費の一部は2019年度上半期に支出した。残る7府県のうち3県が辞退し、4府県の報告書が現在も未提出のため執行が遅れている。例年、環境省の予算決定と本学会への支払いが10月になっていること、主任調査員の反応にばらつきがあることなどから、実際の執行は当該年度の11月～翌年度に行っている状況である。  
 注7：2019年度内（環境省の会計年度；2019年4月1日以降）に支出したレッドリスト改訂のための調査解析費。  
 注8：2019年度内（環境省の会計年度；2019年4月1日以降）に支出したレッドリスト改訂のための調査解析にかかる事務経費・振込手数料。  
 注9：2019年度内（環境省の会計年度；2020年3月31日まで）に支出予定。

## 2019年度決算報告案 特別会計〔命名規約〕（2019.12.31現在）

収入	予算	決算	予算との差異
前年度繰越金	851,421	851,421	0
命名規約和訳販売	0	0	0
合計	851,421	851,421	0
支出			
命名規約和訳出版	360,000	233,812	△ 126,188 注1
次年度への繰越金	491,421	617,609	126,188
合計	851,421	851,421	0
単年度収支	0	0	0

- 注1：「国際藻類・菌類・植物命名規約（深川規約）2018日本語版」の買取りにかかった費用。買取りを条件に北隆館が出版を引き受けたため。

## 2019年度決算報告案 特別会計〔国際シンポジウム〕（2019.12.31現在）

収入	予算	決算	予算との差異
前年度繰越金	200,000	200,000	0
国際シンポジウム積立金	200,000	200,000	0 注1
合計	400,000	400,000	0
支出			
国際シンポジウム準備金	0	0	0 注2
国際シンポジウム若手派遣	0	0	0 注3
次年度への繰越金	400,000	400,000	0
合計	400,000	400,000	0
単年度収支	0	0	0

- 注1：2022年の開催に備えての積立金。一般会計より移管。  
 注2：日本でのシンポジウム開催がなかったため。  
 注3：シンポジウムの開催がなかったため。

## 2019年度決算報告書 特別会計 [顕彰事業] (2019.12.31 現在)

収入	予算	決算	予算との差異	
前年度繰越金	385,924	385,924	0	注 1
一般会計より移管	0	0	0	
合計	385,924	385,924	0	
支出				
次年度への繰越金	385,924	385,924	0	注 2
合計	385,924	385,924	0	
単年度収支				
	0	0	0	

注 1: 植物地理・分類学会の事業を引き継いだもの。

注 2: 該当する支出がなかったため。

## 2020年度予算案 一般会計

収入の部	単価	数	予算	前年度予算との差異	
会費					
通常(一般)	7,000	743	5,201,000	△ 105,000	注 1
通常(学生/海外)	3,000	119	357,000	63,000	注 1
団体会員	8,000	21	168,000	8,000	注 1
自動振替手数料	132	145	19,140	19,140	注 2
APG カラーチャージ			350,000	100,000	注 3
バックナンバー販売			120,000	0	
利息			50	△ 50	注 3
雑収入			50,000	0	
合計			6,265,190	85,090	
支出の部					
大会補助費			100,000	0	
講演会補助費			70,000	0	
出版物印刷費					
	APG vol.71 (1,2,3)	930,000	3	2,790,000	0
	植物地理・分類研究 vol.68 (1,2)	700,000	2	1,400,000	0
	ニュースレター No.76-79	55,000	4	220,000	0
学会誌編集補助費			250,000	0	
英文校閲費			50,000	0	
出版物送料					注 3
	APG 送料	110,000	3	330,000	20,000
	和文誌送料	110,000	2	220,000	10,000
	NL 送料	90,000	2	180,000	△ 180,000
会議費			0	0	注 5
学会賞表彰経費			45,000	△ 5,000	注 3
自然史学会連合負担金			20,000	0	
分類学会連合分担金			10,000	0	
事務局管理費					
	消耗品費		20,000	△ 30,000	注 3
	交通費		85,000	35,000	注 6
	封筒等印刷費		0	0	注 7
	通信費(小包手数料を含む)		50,000	0	
	手数料・その他		15,000	0	
	集金代行基本料金 / 資金振込手数料		4,070	830	注 8
	集金代行振替手数料	132	148	19,536	△ 1,264
	レンタルサーバー使用料		29,700	2,700	注 10
国際シンポジウム積立金			200,000	0	注 11
予備費			170,000	170,000	注 12
合計			6,278,306	22,266	
単年度収支			△ 13,116	62,824	
前年度からの繰越金			5,706,920	555,007	
次年度への繰越金			5,693,804	617,831	

注 1: 会員数見直しによる。

注 2: 自動振替にかかる集金代行振替手数料(消費税を含む)は会員負担のため。

注 3: 前年の実績に基づき更新。

注 4: 学会誌との同時発送を年 2 回行う。

注 5: 会場を借用しての幹事の引継ぎ会議は実施せず、個別役職ごとに引継ぎを行う。

注 6: 幹事の引継ぎおよび選挙にかかる費用。

注 7: 在庫が多数あるため、新たな印刷は行わない。次期幹事決定後、必要に応じて封筒の差出人住所を修正する。2021 年 2 月発行の NL80 の発送に間に合うよう、修正費用は今年度予算の予備費に計上する。修正が必要な場合、2021 年度は出版物送料に修正シール貼付作業費(発送 1 回あたり約 6,600 円)が発生する。

注 8: 消費税率が変更されたため。

注 9: 消費税率が変更されたため。集金代行振替手数料の消費税分は、従来学会が負担していたが、今年度から会員負担に変更。

注 10: 学会ウェブサイトの刷新(ワードプレスウェブサイトを導入)に伴い、レンタルサーバーの契約内容を変更するため。

注 11：2022 年の開催および若手派遣に備えての積立金。特別会計へ移管。

注 12：前年度は予備費を学会誌編集補助費に充てたため。今年度は、選挙にかかる費用（40,000 円）と封筒の修正費用（修正シール代 30,000 円）を追加。

### 2020 年度予算案 特別会計 絶滅危惧種調査決算案

収入	予算	前年度予算との差異
前年度繰越金	2,747,296	△ 5,022,896 注 1
レッドリスト改訂のための解析委託費（2020 年分）	3,600,000	3,600,000 注 2
合計	6,347,296	△ 1,422,896
支出		
事務経費（2019 年分）	2,747,296	△ 1,472,896 注 3
レッドリスト改訂のための解析費（2020 年分）	1,000,000	1,000,000
事務経費（2020 年分）	600,000	600,000
次年度への繰越金	2,000,000	2,000,000 注 4
合計	6,347,296	2,127,104

注 1：2019 年度（環境省の会計年度；2019 年 4 月 1 日～2020 年 3 月 31 日）委託費による繰越金。

注 2：2020 年度（環境省の会計年度；2020 年 4 月 1 日～2021 年 3 月 31 日）委託費。

注 3：レッドリスト改訂のための調査解析にかかる事務経費（収集されたデータをとりまとめるための人件費、交通費、消耗品費、振込手数料など）。

注 4：環境省の会計年度内（2020 年 3 月 31 日まで）に支出予定。

### 2020 年度予算案 特別会計 命名規約予算案

収入	予算	前年度予算との差異
前年度繰越金	617,609	117,609
合計	617,609	△ 233,812
支出		
次年度への繰越金	617,609	117,609 注 1
合計	617,609	△ 233,812

注 1：該当する支出がないため。

### 2020 年度予算案 特別会計 国際シンポジウム予算案

収入	予算	前年度予算との差異
前年度繰越金	400,000	200,000
国際シンポジウム積立金	200,000	0 注 1
合計	600,000	200,000
支出		
国際シンポジウム準備金	0	0 注 2
国際シンポジウム若手派遣	100,000	100,000 注 3
次年度への繰越金	500,000	100,000
合計	600,000	200,000

注 1：2022 年の開催および若手派遣に備えての積立金。一般会計より移管。

注 2：日本でのシンポジウムの開催がないため。

注 3：韓国・済州島で開催される予定。

### 2020 年度予算案 特別会計 顕彰事業予算案

収入	予算	前年度予算との差異
前年度繰越金	385,924	0
合計	385,924	0
支出		
次年度への繰越金	385,924	0 注 1
合計	385,924	0

注 1：該当する支出がないため。

